

特別講演1.. 朝鮮時代地理書と古地図の理解

ソウル大学校歴史学部教授

鄭 杓根 (チョン・ヨグン)



ソウル大学校内にある奎章閣(王立学術機関兼図書館)には、朝鮮時代の地理書と古地図が韓国の国宝に指定されているものも含め国内で最も多く所蔵されている。

地理書とは、地域の情報を一定の体系と項目に従って総合的に整理した本である。全国単

位、またはある特定の地域の歴史と自然、社会、文化などに関する多様な情報を取め、実用性と記録性を兼ね備えていた。地理書の編纂は三

国時代からあったと考えられているが、現在残っている韓国のも最も古い地理書は一一四五年に作られた『三國史記』地理志である。朝鮮時代に入ると、『世宗実録』地理志と『新增東國輿地勝覧』など、より詳細な内容が含まれた地理書が作成されるようになった。これらの地理書は国家で編纂を主導した官撰地理書であるが、朝鮮後期には個人が編纂した地理書も数多く登場し、地方におけるさまざまな地理情報の記録が進んだ。一九世紀以降の近世には西洋勢力に対する軍防を目的として

各地方で邑誌が製作され、中央政府に献上した事例も残されている。古地図とは、近代的な測量技術が適用されておらず、伝統的な方式で制作されたものを意味する。可読性の高い絵画式の地図や、距離や

面積を正確に記す方眼式地図などさまざまな形式が用いられ、特に軍事的用途や行政目的で広く活用された。備辺司印方眼地図のように精密さを重視した地図や、地方の詳細な地図、さらには王のご覧用の地図など、多様なニーズが見てとれる。

例えば、一般的に地図は、上部を北側、下部を南側として描くが、都邑である漢城府を描いた『都城図』においてはその反対方向、すなわち上部を南側、下部を北側として描かれている。これは、いつも南側を向いて政務を行う君主が見やすいように作られたためと考えられる。このように、地理書や古地図の一つ一つは地形情報だけでなく、政治的・文化的要素も反映されており、作成当時の社会や行政の仕組みを知手がかりにもなる。

朝鮮時代の地理書や古地図は奎章閣のウェブサイトで公開されており、自由に活用可能である。歴史地理情報システム(Historical GIS)は、地理書や古地図をデジタルに変換できる最新の手法だが、データ構築には多大な労力が必要であり、研究機関による長期的な支援が重要である。デジタル時代において、この方法論が普及しより効果的に活用されることを期待する。

プロフィール

●二〇〇八年にソウル大学校にて博士學位を取得し、徳成女子大学校史学科副教授を経て、現職。専攻分野は韓国の中世史(高麗時代)、および韓国の歴史地理で、近年は中世地方社会研究、および歴史GIS(Historical GIS)の方法論を主とした韓国前近代の地理書と古地図に関心を寄せ研究を進めている。